

## 「ビブリオトーク」を生かした読書活動

— 読書支援のあり方を探る —

笹倉 剛

### はじめに

子どもの読書活動を豊かにする取組の一つとして、「ビブリオトーク」という読書技法を考案し、それを4年間ほど取り組んできた。このビブリオトークは子どもの読書活動だけでなく、一般の大人の読書活動としても十分に生かせる活動である。最近、図書館や学校などでも取り組み始めるようになってきた。

まず最初に、最近の子どもの読書をめぐる現状と、それに対する図書館の課題について述べたい。

#### 1 子ども読書の現状と図書館の今後の課題

「子ども読書年」から20年弱を経過しようとしているが、子どもの読書は果たして大きく向上したのだろうか。全国学校図書館協議会や毎日新聞社の読書調査結果を見ると、一時的には少し向上したが、最近ではあまり変化がないといってもよいほどである。どうしてなのか。「子ども読書活動推進法」「文字・活字文化振興法」まで作り、それに期待されてきたが、その効果がほとんど出ていないのが実態ではないだろうか。この法案のときにもいろいろ指摘があったが、やはりこれらの法案の根底に「人」の問題が欠けていたのが大きな要因だと考える。つまり、児童図書館員をすべての図書館に置くとか、地域の読書活動の核となる児童図書専門員を配置するなどとはまったく触れられていない。さらに子ども読書活動の地域における責任の所在もあいまいである。例えば、学校における読書活動は教育委員会、それ以外の生涯学習における読書活動は生涯学習課または知事

部局であったりすることもある。

最近の少しよい兆しとして、学校に「学校司書」が配置される自治体が増えてきたことがある。それにしても学校司書の処遇や待遇にまだまだ多くの問題を抱えているが、ある意味では前進したと言えるのではないだろうか。ただ、この学校司書の法案もあくまでも努力目標であるために、積極的に導入する自治体がまだ少ないのが現状である。「学校図書館を考える会」などの活動がある地域では、ある程度の成果も見えてきている。しかし、全国的に見ればまだまだ子どもの読書活動を推進する大きな波が押し寄せていないのが実態である。

では、図書館の子ども読書活動の推進はどのようにすればよいのだろうか。

現在日本の多くの図書館では、図書館という知識の宝庫が生かされていないのではないだろうか。日本は縦組織の意識が強く、本当の意味での「連携」ができていない。私は「連携」という考え方を取り除いて、むしろ組織を融合すべき時代に来ていると考えている。それは図書館の機能と図書館員の専門性をいかに発揮できるかというシステムであると言ってもよい。

図書館と他機関との融合及び接点を強くする。  
(各「施設」間の融合)

図書館法等で他機関との連携が叫ばれているが、これからの時代は連携では弱すぎると考える。お互いの機関が相手機関との接点を探り、連携方法を模索するのもよいが、そこには個々の機関の主体性及び閉鎖性は大きく変わることはない。例えば、図書館における子どもの読書活動の推進と